

saxicola, the branches are rather short and numerous in number, forming pinnate system of protonema.

Literature cited

Allsopp, A. & Mitra, G.C. 1958. The morphology of protonema and bud formation in Bryales. *Ann. Bot.* 22: 95-115. Nehira, K. 1964. The germination of spores in Musci 2. *Hikobia* 4: 43-51. —. 1965. The germination of spores in Musci 3. *Hikobia* 4: 181-187. Nishida, Y. 1966. Studies on the germination of the spore in some mosses (VI). *Rep. Att. Mid. School, Shimane Univ.* No. 9: 61-68. Noguchi, A. & Miyata, I. 1957. Sporelings and regenerants in some mosses. *Kumamoto J. Sci. B. Sect. 2*, 3: 1-19.

* * * *

藓類シトネゴケ目 18 種において、胞子発芽と原糸体の形態観察をおこなった。これらのうち、6 科から 6 種 (*Anacamptodon latidens*, *Lescurea saxicola*, *Thuidium bipinnatulum*, *Leptodictyum riparium*, *Plagiothecium denticulatum* および *Hypnum lindbergii*) を選び、それぞれの原糸体の発達状態を記載的に述べた。その結果、いわゆる pleurocarpous のグループであるシトネゴケ目においては、数例を除いて原糸体に異質糸状性がみられなかった。異質糸状性がわずかにみられたのは *Anacamptodon latidens* であるが、この種では茎葉体の芽の分化が原糸体の基部付近に生ずる傾向があった。*Lescurea saxicola* の原糸体の細胞はより短かく、この原糸体は分枝の著しい羽状のものであった。

□遠山富太郎：杉のきた者 pp.215 中公新書 419 (1976, I) ¥380。近頃はよく大学教授が停年退職され、在職中に抱いていたいくつかのテーマのどれかについて、多年の研究の結果（それは疑問と結論とになるが）を述べた一書を書くということがある。本書もそれで、島根大農学部教授、以前に京大の演習林におられた。スギへの愛惜とスギの発現と分化、その性質をとりあげた文化史的展開が重なっている。終りから読んだ方がわかりよいと思う。スギ科の各種の衰亡と、逆にスギだけが急速に三紀末から洪積世に出現、発展し、そして登呂遺蹟で多量の発掘をみる。それを割って板にできるという性質があったからで、屋根葺きに使われ、糞尿桶と酒樽になり、浅底の高瀬船の資材として、という風に存外深い文化的意義があるとする。その主張はいささかきついが、一つの主張として読み終るとうなずけるものがある。（前川文夫）